

昔の幼稚園の思い出

高 森 豊

明治三十三年熊本市に生まれた私は五才で創立二十九年の五福幼稚園に入園した。珍しいバイオリンをかなでられる先生を真中にして「ひーらいた、ひーらいた」の遊戯をしていて、あの遊戯室で遊んだこと、れんげの花、つるぼっぼなど折ったり、組織などしたことが、今日の日も思い出されて、時々夢を追うことがある。そしてその先生の顔はほんとなつかしく思い出される。部屋は五福小学校内の一隅であったようである。肩からつるして行く、うるしぬりの丸形の弁とうの上には盃形の湯呑みがふせられて、そのきれいな模様を喜んで、昼食をしていた様子、全く夢みにたいに私の胸を去来する。

そしてそれから三十二年の歳月を過ぎて、五福幼稚園に勤務することになった。人の世の縁の糸の強いつながりに心うたれた。なつかしくてたまらぬ中に、全く私はろうばいしてしまった。幼児を向うにすることは考えたこともなし、二、三ヶ月は書籍戸棚のとりこになって、関連あると思うものはみなあさり読みを

した。しかしなかなかによりどころははつきりとかめぬし、系統づけられない、そして私は苦しんだ。ただ「教育の道である」と思い至って、一息ついた。

でも昭和八年は昔とはいいながら、大正十五年の幼稚園令が出されて、それが八年の間に浸みわたり、幼稚園にも相当の方向づけがなされていたように思われる。「幼稚園は幼児を保育しその心身を健全に発達せしめ、善良なる性情を涵養し、家庭教育を補うを以て目的とす」と規定され、その保育内容として「幼稚園の保育項目は、遊戯・唱歌・観祭・談話・手技等とす」と定めていることがそれである。

時の熊本県にも熊本市公立幼稚園が六園・私立が三園・郡部に町村立が四園・私立が三園県下に十六園あったようであるが連けいともなく、ただ熊本市の市立はお互いに手をつなぎ、研究会をしていた。保育の在り方、五項目それぞれの理解を深めたり、また各園は交替して、保育の研究会などを開催していた。互に気

脈相通じて、共に保育の向上に邁進したものである。

時の幼稚園はフレーベルの流れをくみ、一面米国の保育も混じて、時には恩物は硝子張りの教具入れの中に飾られ、其の他は物置きにしまわれた様相であった。

一部の教師は「幼児の実態を捉えて、そこを出発点として保育をする」といって、入念に幼児を観察し、メモして、一生けん命に努力していた人もあった。

しかし時の保育界は殆ど社会の行事を中心とした細目（今日のカリキュラム）が編成され、幼児の心身の成長発達、心情の陶冶をねらって愛育されていたのが実状である。ただ、何となく不安であり、確信なく、もだえたのは真実である。

雑草、保育真諦、誘導保育、などの倉橋惣三先生の著書、これらは皆私の魂をゆさぶり、私の前途に光を与えて頂いたものであった。もとより深い先生の書物の真意に徹することは不可能であり、不可解な処もたくさんあった。先生のもとに馳せ参じ、あれもききたい、ただしたい、とあせったが時代はそんな時を与えられなかった。幸い私の身边にもお茶の水出の人がいて、常に論議を交わし、私が常に啓蒙して貰えたのは、せめてもの幸いであったと感謝している。

こんな書物に導かれ、勇敢にも市内全園に、保育の実際をやつてのけた。まさに飛やくのはなはだしいことであり、皆をして予想天外の感をいだかせたと今更のように思い起こすことである。

幼児健康増進の爲にと園外保育の実施と、幼稚園給食を母姉の了解喜びの中に発足した。父兄の協力のもと給食室を設備し、栄養食の勉強、時の大家、佐伯栄養博士の講義をうけ今日にいう完全給食を実施した。教師一同の強い協力のもとに、十年の歳月をやり直した。この間に全市立幼稚園もこれに踏み切り、家庭にも、子どもたちにも楽しまれた。「幼稚園のライスカレーをつくつてよ」と頼まれるからと教えを乞うものも出てきつてうれしかった。

お節句のお団子作り、楽しい誕生会、母子席を並べての会食、遠足の楽しいお弁当作りなど、ねらう偏食矯正、身体発達などともよりながら、親しみながら、同じ食事に喜ぶ心情などまことにうれしい月日であった。

また一方、自立の精神を発達させるため、道中の送迎は、さしひかえて欲しいと要望したり、何キロの道等、元気で歩いた園外保育、野に行き、山に登り、額に汗しての往復、まことに体力増進、真に安全な時期であった。その頃の幼児は恵まれた時であったと、心からよろこびにたえない次第である。

今頃のようにもとより文化は進まず、種々の物にも正しく劣つてはいたが、心の豊かさは、ほんとに今日とはかわり、美しい、親しい心の、ゆとりある生活を営んできた。

子どもと子ども、そして、子どもと教師、心のふれ合いは深かった。心の通いは近かった。

まことに今日の教育は研究されている。

向上している。幼児も成長している。

しかし幼児の身辺は必ずしも、幸いではない。

マスコミは、よしにあしに迫っている。

車輪はつねに生命をねらっているかとさえ、思われる。

フレibelがいたあのガーデンで、幼児自らの神秘を育み、母

親とともに、幼児の導きに、正しさを得るなら、この上もない教

幼稚園創立90周年の年にあたって

昔の幼稚園の思い出

大正三年四月、弟が附属幼稚園に、はいると同時に、私が専攻科三年を終って「幼稚園の先生になる道は？」と倉橋先生におたずねしたところ、「この学校の中に、そういうコースがある」と指示していただいた。そして早速手続きをしたのが「保育実習科」であった。其年の入学者は十一名、病気の為翌年まで残られた。さん以外は、その年の七月十日「所定の学科を履習せり」ということで、たちまち「幼稚園」という現場に送り出されてしまい、全く文字通り無我夢中であった。

当時のお茶の水幼稚園々舎は、今の文京区、本郷通りに面した

育であろう。

九十年を経た今日、幼児教育の様相も、社会の情勢、この道の研究により、まことに大きな進歩をとげたと思う。そして大衆化されつつある幼稚園、近代化されて行かねばならぬ親の協力、フレibel教育の近代化など、私たちは、しんげんに考え実践して、今後の道を打たねばならぬと思う。(熊本県 ゆたか幼稚園)

草野京子

門をはいって右、東に向いた玄関入口には数段の石段があり、登ると、東西に長い廊下、つきあたりに、丁字形に広い遊ぎ室、左側(南)は保育室、入口に近いのから三の組、二の組、一の組、右側は、入口から職員室、別棟の二部保育室に行く廊下、手洗、洗面所、別棟の小使室から、木造の二部の保育室は天井はひくいが、明るく陽あたりが良かった。一部の方は、「一の組」「五才児二五名ぐらい」、「二の組」「四才児二五名ぐらい」、「三の組」「三才児一八名ぐらいで、二部は年令でわけず、五才児も三才児も兄弟のように一つ机をかこみ、椅子の高さに差がついていたように思